

1. 琵琶湖周航の歌の歌碑

2022年10月に琵琶湖西北岸の高島市今津に行った。午前中の会議のあと今津港に行く。「琵琶湖周航の歌」の歌碑があった。そして琵琶湖周航の歌資料館があった。じっくり見た。

そのときは、琵琶湖周航の歌を歌うことになろうとは思ってもしなかったのだが、なんとなく心惹かれた。資料館を出ると、港からは竹生島行きの船が出ようとしていた。ふと午後の会議をサボって島を往復したいと思ったのだが、次の便はかなり先だったので諦めた。



まず、この写真の歌碑に刻まれた文字を起こした。見ての通り元は縦書きである。番号は付いていない。

琵琶湖周航の歌

作詞 小口太郎 原曲 吉田千秋

- われは湖の子 さすらひの 旅にしあれば しみじみと
昇る狭霧や さざなみの 志賀の都よ いざさらば
- 松は緑に 砂白き 雄松が里の 乙女子は
赤い椿の 森陰に はかない戀に 泣くとかや
- 波のまにまに 漂へば 赤い泊り火 なつかしみ
行方定めぬ 浪枕 今日は今津か 長濱か
- 瑠璃の花園 珊瑚の宮 古い傳への 竹生島
佛の御手に いだかれて ねむれ乙女子 やすらけく
- 矢の根は 深く 埋もれて 夏草しげき 堀のあと
古城にひとり 佇めば 比良も伊吹も 夢のごと
- 西国十番 長命寺 汚れの 現世遠くさり
黄金の波に いざこがん 語れ我が友 熱き心

歌碑の近くには、解説の銘板があり、この今津こそが発祥地だと記している。小口が作詞をしたのは今津の宿、そしてその宿泊日が1917年6月28日と確定したとのことであった。

しかし、琵琶湖周航の起点はここではない。大津市の三高(旧制第三高等学校)艇庫である。そこで先日姫路の先に行った帰り、大津に寄ってみた。ここにも6番までの歌碑があった。

内容は一緒だが、少し表現が異なっていた。「さざなみ→さざなみ」、「戀→恋」、「波→浪」、「泊り火→泊火」、「西国→西國」、「こがん→漕がん」。まあ同じと言え



ば同じである。

さて、どっちが本家なのだろうか。今津のは平成6年建立、大津のは昭和48年とある。大津の方が本家でありその順番ではあるが、元々あったのではなく、残念ながら、加藤登紀子のヒットのあとに建てられたのだ。

歌碑はこの二つ以外にもあるのだそう。順番通り見ていこう。と書いたが、1番だけの歌碑はない。その代わり、大津市の歌碑の横には、でーんと歌い出しが刻まれていた。

2番の「雄松が里」とは、JR 近江舞子駅近くの雄松崎。松は緑に砂白き、まさに白砂青松(はくしゃせいしょう)。近江舞子の海水浴場は琵琶湖イチだそう。そして、湖岸には2番だけの歌碑がある。(画像は「彦根の歴史ブログ」から)



3番は「今津か長浜か」。今津には前述の通りフルヴァージョンがある。長浜は3番にしか出てこないで、建てるのであれば長浜。ところが長浜には碑がなく、湖岸の豊(ほう)公園に、2017年にできた。歌碑は唯一のガラス製。「行方定めぬ浪枕」の歌詞にちなみ、ボートをイメージしたデザイン。沢山の人に親しまれるように、ベンチとしても使用できる形状だそう。(産経新聞の記事より)



4番は竹生島(ちくぶしま)、にぎりません。「神を齋(いつ)く島」が名前の由来とのこと。西国三十三番札所「宝厳寺」と「都久夫須麻神社」がある信仰の島。琵琶湖汽船のチラシによると、今津港からは竹生島往復航路が1日5便(冬期は2便)あって、70-80分ほど滞在して、戻ってくる。長浜港からも5便(繁忙期は8便、冬期は2便)ある。それぞれ片道乗って、琵琶湖

横断することもできる。



次は5番。比良は西岸の大津市、伊吹は東岸の米原市だが、いずれにも立ち寄った形跡はない。



そこで「古城」がキーワード。「矢の根」は古戦場を連想させ、戦国時代に幾度の戦を経験した佐和山城と見る人もいる。一方、

立ち寄るとすれば湖に近い彦根城という見方が多い。小口がどこを思ったかはもはや確認できないが、三高最後の学生が中心となって、2005年に彦根に建てたとのこと。この碑は5番だけでなく全歌詞も付いている。(産経新聞の記事より)

6番は近江八幡市の長命寺を歌っている。長命寺は西国三十三箇所の札所の一つには違いないのだが、十番ではなく三十一番。小口が「三十一番では語呂が悪い」からと西国十番としたのだそう。ちなみに西国十番は宇治平等院近くの三室戸寺。



でやっぱりフェイクはいかん、と思った人が「西国十番」をカットした碑を作ったようで、長命寺の長い階段を降りた長命寺港に建てるとのこと。



で、一巡したのですが、1番の志賀の都とはどこでしょうか。関西人には常識かも知れませんが、いまの大津市です。飛鳥時代に天智天皇が飛鳥から近江に遷都した都とされています。わずか5年間(667年-672年)で廃都となりました。史料上「近江大津宮」「大津宮」「志賀の都」「水海大津宮」と表記され、歴史的にも明確ではないようです。ただし、大津市錦織の住宅地で宮の一部遺構が確認され、「近江大津宮錦織遺跡」として国の史跡に指定されているとのこと。

2. フィックス艇はどこに

大津市に寄ったのは前号の須藤さんの記事を読んだ直後だったので、大津市の元艇庫に何か残されていないかと思った。旧三高の艇庫は、いま「ヨットクラブ神陵艇庫」となっているが、1912年の建築なので、もうボロボロ。「修復・保存にご協力を」というポスターが貼ってあった。

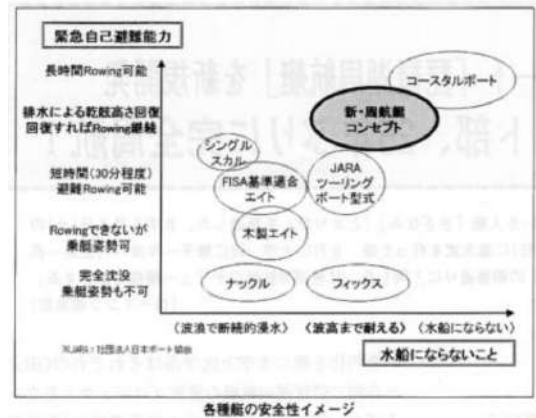


隙間から覗いてみると、中にボート類は無く、オールらしきものが少し置いてあるだけだった。

京都大学のいまの艇庫は、ボート部のホームページによると、合宿所とともに瀬田の唐橋のそばにあるようだ。そこには大小70のボートが保管されているが、フィックス艇はなさそう。須藤さんのガイドに沿ってフィックス艇の記事を検索すると、紹介のあった今津町のレース(今津レガッタ)の他には殆どなく、諏訪清陵高校が高島市のフィックス艇を借用して周回をおこなった(2007年7月)とか、宇和島東高校がフィックス艇のレプリカを作った(2021年)とか、しか見当たらなかった。無念。なお、琵琶湖周航の歌資料館には、フィックス艇-実物(全長13.7m、幅1.25m、1993年建造)が置いてあるとのこと。

3. 現代の琵琶湖周航

「100年前のフィックス艇」というブログには、これまでずっと、1回生が3泊4日の琵琶湖周航をおこなっていると書いてある。使用する船は1986年まではフィックス艇だったが、その年に底が抜け中断、翌年からナックル艇に変更。波に弱いため大波が立つ湖北までは行けず「琵琶湖半周航」が25年続いたあと、OB・OGが琵琶湖周航専用艇の「さざなみ」とまりび」を建造、のちに「うみのこ」を加え、3艇で琵琶湖を周航しているとのこと。この周航艇は、波をかぶって完全に浸水した状態でもこぎ続けることができる不沈艇なんだそうです。



2011年8月の周航記事から、行程を地図に落としてみました。琵琶湖一周はサイクリング、ドライブだと200キロ。周航は内側なのでそれよりは短い距離になりますが、それでもすごい距離ですね。(記事は2011年のもの)

京都大学ボート部のホームページによると、琵琶湖周航はいまも毎年8月に1回生が行ってるとのこと、そして去年がどうだったか、新2回生が1回生(新入生)むけに書いた記事では、去年は台風の接近で初日、2日目は漕ぎ出せず、3日目に長命寺まで、4日目に艇庫に戻った、とのことでした。(以上文責 B2 山路)

